

平成24年度 滋賀医科大学 入学式



平成24年度新入生歓迎

平成24年度入学宣誓式
新任教員紹介

- 第37回浜松医科大学との交流会
- 平成24年度新入生研修
- 平成23年度卒業式



勢多だより

JULY 10, 2012

C O N T E N T S



メインテーマ：「平成24年度新入生歓迎」

トピックス

- 01 | 平成24年度入学宣誓式
- 03 | 平成24年度新入生紹介

新任教員紹介

- 06 | 内科学講座（糖尿病内分泌・腎臓・神経内科）
宇津 貴 准教授
- 07 | 大学院医学系研究科（再生・腫瘍解析系専攻・がん専門医師養成
コース（総合がん治療学））
醍醐 弥太郎 教授
- 08 | 基礎看護学講座
中西 京子 講師
- 09 | 臨床看護学講座
畑野 相子 教授
- 10 | 公衆衛生看護学講座
川畑 摩紀枝 教授

キャンパスライフ

- 11 | 第37回浜松医科大学との交流会
- 13 | 平成24年度新入生研修
- 16 | リーダース研修
- 17 | 医師・保健師・助産師・看護師国家試験の結果

図書館からのお知らせ

- 18 | 私がすすめるこの本2012

国立病院機構 滋賀病院だより

- 20 | 新病棟建設着工と臨床実習の開始
総合外科学講座
来見 良誠 教授
- 21 | 滋賀病院に赴任して半年間の感想
総合外科学講座
菊地 克久 講師

インフォメーション

- 22 | 平成23年度 卒業式
- 26 | 平成23年度 学位授与式
- 27 | 平成23年度 学位論文学長賞等授与式
- 28 | 名誉教授称号付与
第35回解剖体納骨慰霊法要

編集後記（宮松編集長）

平成24年度 入学宣誓式

学 長
馬 場 忠 雄

入 学 式 告 辞

昨日来の春の嵐をもたらし前線も通り過ぎ、湖国の桜もようやく開花し始めました。

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。本日はお忙しい中、ご臨席を賜りましたご来賓の皆様、ご父兄の皆様、また教職員の皆様、誠に有り難うございます。

本日、医学科100名、看護学科70名（編入学生10名を含む）の入学生を迎え、キャンパスに若々しい活気が満ちあふれる喜びを感じております。これまで諸君を支えてこられたご両親、ご家族の皆様にご心よりお慶び申し上げます。

本学は、学問を学ぶにふさわしい緑豊かな自然環境に恵まれ、周辺は大学や県の文化施設があり、文化ゾーンとなっております。そして、優秀な教員を揃えて、充実した医学・看護学の教育研究を提供する体制を整えています。本学の教育の基本は、幅広い教養を身につけ、倫理観に裏打ちされた信頼される医療人の育成であります。絶えず自己研鑽し、倫理観を養い、医学・看護学の基本的知識と最新の知見を学び、社会に奉仕する医療人として、あるいは、基礎・臨床の教育研究者として、また、今注目されているメディカルイノベーションの領域、あるいは国際医療の場で活躍するなど多様な人材の育成を目指しております。若い諸君は、無限の可能性をもっており、いろいろなことに挑戦して下さい。

大学生は高校生とは異なり、自律性をもって行動することが求められます。自分自身を謙虚にみつめ、何が課題であるかを探し出し、自らが

向上しようと努力すること、また、人と人との接点となるコミュニケーション能力を伸ばすことに努めて下さい。医療・福祉の現場では、他者の話しに耳を傾け、事柄を理解し、その上で自分の知識と客観的証拠に基づいて、説明し、行動する能力が求められます。このような能力は、幅広い知識の上に努力して徐々に積み上げられてくるものです。本学においても、一般教養として文系の科目を用意しています。本学は、学生が国家試験に合格するためだけの教育を行っているものではありません。地域の方々と共に学ぶカリキュラムも取り入れ、医療人として、信頼される人格をもった人づくりを基本としています。また、課外活動として体育系、文化系のクラブ活動も盛んで、多くの友達と共に活動を通して体力や英気を養って下さい。

本年度から、国立病院機構滋賀病院で、今医療において求められている総合医としての実習を、総合内科、総合外科の二講座を中心に行うこととなります。また、参加型臨床実習を充実するためStudent Doctor制の導入や客観的な臨床実習の評価を行うことになっています。看護学科では、本年度から、看護師、保健師と助産師課程の教育の充実を目指し、教育課程が改正されました。そのため、本学においては、3年次から、保健師課程30名、助産師課程8名とそれぞれ選択制となります。今後、取得した資格を十分に生かすことを念頭において下さい。

大学院博士課程に進学された25名、修士課程に進学された13名の皆様、ご入学おめでとうございます。医学・医療に対する社会のニーズは多様化し、学際的な生命科学研究や創薬に携わる人材のほか、福祉、介護、国際医療協力など様々な分野においてリーダーとなれる医療人が求められています。

大学院博士課程は、がんプロフェSSIONAL養成基盤推進プランが京都大学を中心に引き続き採択され、また、再生腫瘍解析系専攻に醍醐弥太郎教授が就任します。修士課程では、昨年10

月に基礎看護学研究領域に看護管理実践をもうけ、藤野みつ子看護部長が大学院教授として担当しています。

研究の新しい発想は、先人の研究を詳細に検討することから生まれてくるといわれます。考えるばかりではなく、実験してはじめて、その方向性がわかるものだと思います。困難な状況が生じるかもしれませんが、その壁を乗り越えたときに優れた研究成果が得られます。医学生命科学の分野は、日々凄まじい進歩を遂げており、その一角に食い込むように努力して下さい。また、看護の分野においても、新しい医療技術の導入とともに、患者のケアが重視され、患者の視点に立った看護研究の成果が期待されています。

このように、教育課程を充実しつつ、研究においてもサルを用いた再生医療、神経難病、MR分子イメージング、生活習慣病予防、総合がん治療など、また、それぞれの研究者の研究においても優れた業績が上がり高い評価を受けています。産学連携によるメディカルイノベーションは、低侵襲医療機器開発と実用化に向けて発展しています。附属病院は、4月からリニューアルオープンして、病院機能が充実し、地域から期待されているオーダメイド医療などの先進医療と心臓血管外科に代表される低侵襲の高度医療を安全に行うことができ、また患者さんのアメニティも改善されました。

このように本学は、教育、研究、診療において高い質を提供しており、諸君は、本学において学ぶことに誇りをもっていただくと同時に、本学の一員として本学を支える気概で日々研鑽してください。

ところで、京都大学iPS細胞研究所所長、山中伸弥先生は、高校で柔道を一生懸命やり、また、神戸大学医学部在学中には、ラグビーで膝の靭帯の切断、鼻や足の指、手首などの骨折を10回以上しており、その都度整形外科の先生に診てもらっていました。父からは、医者になれといわれていたこともあって、整形外科医になろうと思っていました。神戸大学医学部を卒業後、整形外科医を目指し研修し始めましたが、関節リュウマチや骨肉腫、脊髄損傷など状態が悪化してゆく病気の患者さんが多かったのです。また、山中先生自身手術は下手でしたが、手術の上手な

先輩でも治せない病気があるという現実を知り、一旦は、基礎医学を学ぼうとして、大阪市立大学医学部薬理学教室に入って研究いたしました。最初は臨床に戻るつもりが、だんだんと今治せない病気の人を治せるようになるかもしれないと考え、基礎研究で頑張ることになりました。そして、アメリカのポストドクターに採用され、サンフランシスコのグラッドストーン心血管病研究所に留学することになりました。当時、ロンバート・メイリー所長から、研究者として成功するには、Vision and Hard Work、すなわち、明確な目標を持ち、それに向かって一生懸命に努力することが、研究者として成功するための条件であると教えられました。その研究所でES細胞（胚性幹細胞）に出会ったことで、分化多能性細胞に夢中になりました。しかし、帰国後、マウスES細胞の研究を続けましたが、研究費もなく一時中止し、臨床医に戻ろうとしたとき、奈良先端科学技術大学院大学の助教授に採用され、基礎研究を再開しました。ES細胞は、受精卵を壊して作ることから、倫理的な問題がありました。また、患者自身の細胞でないため、細胞移植で拒絶反応が起こる可能性もあるので、受精卵を使わないで、万能細胞をつくることを考えました。丁度その時、英国では、体細胞によるクローン羊のドリーが誕生していました。そして、遂に万能細胞のiPS細胞の開発に成功し、その後、京都大学に移りました。山中伸弥先生の成功の陰には、Vision and Hard Workというロンバート・メイリー所長の言葉が支えにあったのです。

希望や理想は、他人からもらうものではありません。自分から考え作り出すものであります。そして、多様な考え、好奇心を大切に、目的を明確化したあとは、どんなに苦難の険しい道であろうとも忍耐強く取り組む強い精神力をもって下さい。そのあとは、希望に満ちた明るい未来が拓かれるのです。大学は、諸君の希望や志を力強くサポートいたします。

新入生諸君は「志」を高く持って精進し、信頼される医療人として、また世界に羽ばたく研究者として、本学で自分自身を磨いて大きく成長してくれることを期待し、学長告辞といたします。

平成24年4月4日

医 学 科 新 入 生



■ 医学科Aクラス



■ 医学科Bクラス



■ 医学科出身校所在地都道府県別入学者数

都道府県	男	女	小計
群馬	1		1
埼玉	1		1
東京	2	1	3
神奈川	2		2
山梨	1		1

都道府県	男	女	小計
長野	1		1
愛知	3	1	4
三重	1		1
滋賀	16	4	20
京都	20	7	27

都道府県	男	女	小計
大阪	13	13	26
兵庫	1	4	5
奈良	4	2	6
広島	2		2
合計	68	32	100

看護学科新入生



■看護学科



■看護学科編入学者



■看護学科出身校所在地都道府県別入学者数

(第1年次入学者)

都道府県	男	女	小計
福島		1	1
石川	1	1	2
滋賀	2	22	24
京都	1	18	19
大阪		6	6
兵庫		4	4

(第3年次編入学者)

都道府県	男	女	小計
奈良		1	1
和歌山		1	1
鳥取		1	1
愛媛		1	1
合計	4	56	60

都道府県	男	女	小計
滋賀県		1	1
京都府		7	7
大阪府	1		1
兵庫県		1	1
合計	1	9	10

大学院 医学系 研究科

平成24年度 滋賀医科大学 入学式



■大学院博士課程入学者

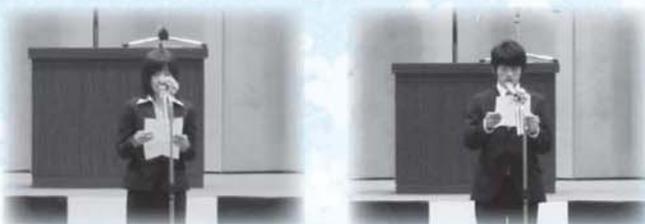


■大学院修士課程入学者



入学生宣誓

在学生歓迎の言葉



新任教員
紹介

内科学講座

(糖尿病内分泌・腎臓・神経内科)



准教授
宇津 貴

2012年3月1日付けで、滋賀医科大学内科学講座(糖尿病内分泌・腎臓・神経)の准教授を拝命いたしました。私は、1982年に本学入学後、旧第3内科の研修医を経て大学院を卒業するまでの12年間は滋賀医大で過ごしました。その後、大阪府下で中小規模の市民病院、国立循環器病センター、基幹病院と、それぞれ異なる環境下に臨床を行ない、2006年より再び滋賀医大で附属病院の腎臓内科診療科長および血液浄化部長を務めています。

私が研修医になったころ、病院の医療は受診された患者さんの治療を行うことが全てでした。私どもの腎臓内科も同様で、院内で腎不全が発

症してから依頼を受け透析を行うなど、悪くなってから対応することに努めていました。しかし、現在は、早期に診断・リスク評価を行い、適切な介入によって疾患の発症や悪化を予防することが重要視されるようになってきています。そのためには、院内はもちろん、院外の施設と連携を密にして多くの患者さんに関わりを持つ必要があります。しかし、そのような対応を行うためには多くのマンパワーを要します。しかし、院内対応だけで精一杯でまだまだ医師数が追いついていないのが現実で、これからの課題と考えています。

さて、学生時代は勉強二の次でラグビーに没頭し将来大学の教官になるとは想像すらしていなかった私ですが、初代教授の繁田先生をはじめ、滋賀医大やこれまでの勤務先でお会いした多くの先生方に御指導していただいたことによって現在に至っています。今後は、この経験を生かし、教育、研究、臨床の場において、多くの方々との出会い、これからの医療を担う若い方々に対し良い影響を及ぼすことが出来るように努めていきたいと思っています。

微力ではありますが、日々できることを地道に積み重ねていき、滋賀医科大学の一層の発展のため貢献する所存でおりますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

経歴

- | | | | |
|----------|------------------------|----------|--------------------------|
| 1981年 3月 | 兵庫県立御影高校 卒業 | 1995年 6月 | 国立循環器病センター 内科医員(高血圧腎臓部門) |
| 1982年 4月 | 滋賀医科大学医学部医学科 入学 | 1999年 7月 | 大阪労災病院 内科医長 |
| 1988年 3月 | 同 卒業 | 2004年 6月 | 同 副部長 |
| 1988年 6月 | 滋賀医科大学医学部附属病院第3内科 研修医 | 2005年10月 | 滋賀医科大学 内科学講座助手 |
| 1990年 4月 | 滋賀医科大学大学院医学系研究科博士課程 入学 | 2006年 1月 | 同 講師 |
| 1994年 4月 | 同 卒業 市立柏原病院内科 | 2012年 3月 | 同 准教授 |

大学院医学系研究科

(再生・腫瘍解析系専攻・がん専門医師養成コース (総合がん治療学))



教授

醍醐 弥太郎

2012年4月1日付で大学院医学系研究科再生・腫瘍解析系専攻の教授を拝命致しました。私は、臨床腫瘍学を専門として、東京大学医科学研究所、英国ケンブリッジ大学腫瘍学講座において、ゲノム解析情報に基づいた新規がん診断法と薬物治療の実用化に向けた創薬研究に加えて、固形がんの薬物療法や臨床試験に関する研鑽を続け、集学的がん医療の開発やトランスレーショナルリサーチに従事してまいりました。2010年7月に本学医学部総合がん治療学講座に着任後は、医学部附属病院・腫瘍内科長、腫瘍センター長として、新たながん薬物療法と緩和医療の開発・実施と先進がん医療活動、人材育成・医療連携を通じた地域がん医療の均てん化に取り組んでおります。

今日のがん医療は各種治療法の進歩により生存期間の延長が認められる一方で、がんの進行や新薬の有害事象に伴う複雑な病態を示す患者さんが増加しています。ゆえに臓器横断的ながんマネジメントによりがん医療連携を推進する臨床腫瘍医とがん専門医（臓器別専門治療、放射線治療、緩和ケア）に加えて、チーム医療を構成する医療スタッフの人材育成も急務です。また、既存の標準治療の効果が望めなくなった患者さんは新しい治療法を求め、「がん難民」という社会的問題が生じており、新薬開発研究やその薬事承認に向けた臨床試験を推進することによって、生きる希望を提供することも大きな課題の一つと考えております。がん医療を支える人的基盤を強固にするには、大学の臨床腫瘍学教育が重要な一役を果たすと考えられますが、本学においては、最新のがん教育、研究、研修の場を提供することで、広い視野を持って世界に挑戦し、我が国のがん医療の向上に寄与しうる人材を育てたいと考えています。また今後も、学内診療科と連携して先進がん医療を担う体制を充実し、標準治療と高度医療から適切な緩和ケアの導入・連携による希望の切れ目のない総合的がん医療を推進していきたいと考えています。これまでの私どもの教育、研究、診療活動に多大なご支援を頂きました皆様にこの場を借りて謝辞を申し上げます。また引き続きご支援とご教示のほどお願い申し上げます。

経歴

1998年 3月 山梨医科大学大学院医学研究科博士課程 修了
1999年 9月 英国ケンブリッジ大学腫瘍学講座 研究員
2002年 1月 東京大学医科学研究所 助手
2005年 3月 東京大学医科学研究所 特任助教授

2008年 4月 東京大学医科学研究所 准教授
2009年 7月 滋賀医科大学医学部総合がん治療学講座 特任教授
2012年 4月 滋賀医科大学大学院医学系研究科
再生・腫瘍解析系専攻 教授

基礎看護学講座



講師

中西京子

平成24年4月1日付で、基礎看護学講座の講師に就任いたしました。

私は京都市立看護短期大学を卒業後、京都市立病院で看護師として手術室、外科病棟等で11年間勤務しました。その後、昭和63年4月から滋賀県立総合保健専門学校において看護学科の教員としての最初のスタートを切りました。

ここでは主に基礎看護学と成人看護学を担当し、基礎看護学概論、シスター・カリスタ・ロイの適応理論に基づいた看護過程および基礎看護学援助論等について教授してきました。そして、特に力を注いだのは、科学的根拠に基づく看護を展開するためのアセスメント能力の育成であり、初学者の学生にアセスメント能力をつけるための授業研究をしてきました。この学校で学生とともに学び、また学ぶことの楽しさを実感したことによって、教育の面白さを知ることができました。そして、実習で“看護ってこういうことなんだ”とわかった時のうれしそうな学生の反応から教員としての喜びも感じさせてもらい

ました。

平成17年4月からは、滋賀県の医療行政を担う医務業務課への勤務となり、圏域での看護や在宅医療分野への施策立案に携わってまいりました。特に看護行政は、量の確保と質の確保の両面から考えた施策が重要であり、国の保健医療福祉の動向を踏まえ、県の課題、県民のニーズ等を把握しながら予算を立て事業化へとしていきました。

そして、新人看護職員研修やがん・糖尿病専門分野看護師研修、訪問看護ステーション・福祉施設の看護職員の研修等の質の向上に向けた研修の企画立案等を行う中、基礎教育の重要性を実感し、再度基礎教育に携わりたいと強く思うようになりました。

また、行政への異動と時を同じくして、滋賀医科大学医学系研究科に社会人入学し、平成19年9月に修士課程を修了しました。修士課程では、新人看護職員の職業性ストレス・抑うつに関連する要因について研究しました。この大学院での2年半は、私にとって、看護を探求することへの面白さと同時に、研究者としてのあり方を厳しくご指導いただき、本当に充実した大学院生活を送ることができました。

学生には、国の動向を踏まえて、今看護職に何が求められているのか、そのためにどんな看護職を目指すのかを伝え、そして何よりも看護することの喜びを共に分かち合い学生とともに学び続けたいと考えています。

教員としても、研究者としてもまったくの未熟者でございますが、皆様のご指導とご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

経歴

1977年 3月 京都市立看護短期大学 卒業
 1977年 4月 京都市立病院 看護師
 1988年 4月 滋賀県立総合保健専門学校看護学科 嘱託実習指導員
 1989年 4月 滋賀県立総合保健専門学校看護学科 専任教員
 1995年 4月 滋賀県立総合保健専門学校看護学科 主任主事
 2002年 4月 滋賀県立総合保健専門学校看護学科 学科長

2005年 4月 滋賀県健康福祉部医務業務課 主幹
 2005年 4月 滋賀医科大学大学院医学系研究科看護学専攻 入学
 2007年 9月 滋賀医科大学大学院医学系研究科看護学専攻 修了
 2008年 4月 滋賀県健康福祉部医務業務課 副参事
 2012年 4月 滋賀医科大学医学部看護学科基礎看護学講座 講師

臨床看護学講座



教授

畑野相子

平成24年5月1日付で臨床看護学講座（老年看護学）の教授を拝命し、本学に就任いたしました。私は、滋賀県生まれの滋賀県育ちで、滋賀県をこよなく愛していますが、まだまだ未知な部分の方が多い状況で、ましてや本学については不慣れな部分ばかりです。皆様のお力添えを賜り、本学の発展に貢献できるよう努力を惜しまず精進したいと考えております。

私は、看護師として病気の人を看護するためには健康な人を知っておくことが大事と考え、公衆衛生看護を学びました。そして、昭和48年に大津市役所に保健師として就職いたしました。そこで、今は亡き京都大学教授の田中昌人先生や奥様で大津市の発達相談員をされていた杉恵先生とお出会いし、障がい児の発達保障に取り組みました。弱者の立場に立ちきるとはどういうことかを考える礎がここで培われたと思っています。同時に、予防活動の難しさにも直面しました。健診結果で、血圧が高く、中性脂肪が高値で、放置すれば脳血管疾患の危険性が高い住民

を訪問し、生活改善を提言したところ「好きなものを我慢して長生きしたくない。太く短く生きるからほっといてくれ」と追い帰された経験は今でも胸に焼き付いています。人々が健康に生きるための支援について学びたいと考え、国立公衆衛生院で学び、保健師教育の場に身を置きました。そして、健康問題の解決について学生と共に考えてきました。

急速に高齢化を迎えた我が国は、高齢者の健康問題が最重要課題になり、昭和57年には老人保健法が制定されました。中でも、認知症は本人の生活の質にとっても、介護する家族にとっても大きな問題です。私が、高齢者の問題に関わり始めたのは平成元年からで、当時は、認知症に対して何が出来るのか暗中模索状態でした。私の研究課題は地域における認知症に対する相談活動から始まったと言えます。どのように対応すればよいのか、予防はできないのかなど家族と共に悩む日々でした。様々な経験を経て、現在は認知症状に対する非薬物療法の研究と、地域の方と協力して認知症予防に関する研究をしています。

教育に関しては、尊厳をもった人として高齢者理解が出来る人材育成を目指しています。核家族化が進み、高齢者と接したことがない学生も珍しくはありません。20代の学生が80歳代の高齢者を理解することは、時代の格差が大きすぎて非常に難しい事です。しかし、高齢者看護において、高齢者理解をせずして看護は成り立ちません。皆様のご指導とご鞭撻を賜り、教育と研究に邁進したいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

経歴

1973年 4月	大津市役所に就職	1986年 4月	滋賀県の保健所勤務
1979年 4月	滋賀県に就職	1989年 4月	滋賀県立総合保健専門学校勤務 学科長
	滋賀県立総合保健専門学校勤務 専任教員	1999年 3月	滋賀医科大学医学系研究科看護学専攻 修士課程修了
1980年 4月	国立公衆衛生院 専攻課程看護コース 入学	2005年 4月	福井県立大学看護福祉学部看護学科 助教授
1981年 3月	国立公衆衛生院 専攻課程看護コース 修了	2007年 4月	滋賀県立大学人間看護学部 准教授
1981年 4月	滋賀県立総合保健専門学校勤務 専任教員	2012年 5月	滋賀医科大学医学部看護学科臨床看護学講座 教授

公衆衛生看護学講座



教授

川 畑 摩紀枝

5月1日から公衆衛生看護学講座の教授として着任いたしました。関西に住み30年になります。滋賀は一度も訪れたことがありませんでした。名所旧跡が多く探索が楽しみであります。

私の研究の関心は健康や健康格差の形成に影響する社会環境要因とその影響の過程を明らかにすることです。以前は生活習慣病予防に向けた行動学的要因の研究をしておりました。個人の行動変容に焦点を当てたアプローチだけではポピュレーションレベルの健康度の改善に限界を感じ、今はさらに上位の要因に焦点を当てて研究を行っています。

公衆衛生の目的の一つは憲法の第25条の生存権を保障することです。人々の健康問題とその問題の背後にある複雑多岐にわたる要因とその過程を明らかにし、改善に向けた政策を立案、実

施、評価する。そうすることで地域で住む人々に健康の保持増進の機会を保障することです。ですから、公衆衛生に従事する看護職には自然科学から社会科学まで幅広くかつ学際的な知識が必要不可欠になります。

看護学科に入学して来られる学生の皆さんは「理系」志向の方が多いような印象を受けます。もっとも看護師には自然科学の知識が不可欠です。学生の皆さんは人間の身体の中でおこる変化や病気のメカニズムの理解にきっと心躍らせておられることと思います。しかし、個別の患者を自然科学の領域から勉強していると、人々が社会で生活していることを時々忘れてしまいます。

現代、グローバル経済の中社会経済格差が拡大し深刻な健康格差を引き起こしています。例えば、高齢者、シングルマザー、非正規労働者など社会経済的にハンディキャップを背負う人たちは健康になる機会を十分には保障されていません。WHOを始め世界の公衆衛生の関心はこの問題にどう取り組むかと言うことです。このような状況で皆さん方大卒の看護職に期待されることは幅広い教養とより高度な専門的知識を生かし既存の制度や政策を変えていくリーダーシップ、あるいはそれを超えて社会規範や価値観など社会そのものを動かす触媒になることかもしれません。これから学生の皆さんとのダイアログを通して一緒に学んで行けることを楽しみにしています。

経歴

1982年 3月	高知女子大学家政学部看護学科 卒業	1998年 4月	神戸大学医学部保健学科 助教授
1982年 4月	神戸市保健所 保健師	2004年 7月	神戸大学医学部保健学科 准教授
1985年 5月	神戸大学医療技術短期大学部 助手	2006年 5月	WHO神戸センター コーディネーター
1992年 3月	北里大学大学院看護学研究科修士課程 修了 (看護学修士)	2009年 7月	トロント大学大学院看護学研究科博士課程 修了 (学術博士)
1993年 5月	神戸大学医療技術短期大学部 講師	2009年 8月	日本赤十字九州国際看護大学 准教授
1994年 1月	神戸大学医学部保健学科 講師	2012年 5月	滋賀医科大学医学部看護学科公衆衛生看護学講座 教授

キャンパス
ライフ

第37回 浜松医科大学との交流会

去る5月11・12日の2日間、浜松医科大学において第37回浜松医科大学との交流会が行なわれました。壮行会を行った後、馬場学長、服部副学長以下引率の教職員と300名近い学生がバスに乗り込み、出発しました。

交流会は2日間とも透き通るような快晴のもと、グラウンド、体育館、武道館等で熱戦が繰り広げられ、グラウンドでの準硬式野球の対抗戦では、服部副学長による始球式が執り行われました。2日間の各クラブでの対戦成績は本学の4勝8敗、通算成績18勝14敗5引き分けとなり、優勝杯を持ち帰ることはできませんでしたが、両校の交流を図る良い機会となりました。



平成24年度 第37回 浜松医科大学・滋賀医科大学交流会 競技結果

平成24年5月11日(金)～12日(土)

種目		滋賀	浜松
硬式庭球	男	×	1 - 5
	女	○	5 - 0
準硬式野球	球	×	0 - 3
バスケットボール	男	×	50 - 56
	女	×	42 - 54
バレーボール	男	×	0 - 2
バトミントン	男	○	3 - 2
	女	×	0 - 5

種目	滋賀	浜松
ヨット	○	17.7 - 38.4
ボート	×	0 - 1
空手道	不実施	
剣道	×	2 - 4
ゴルフ	○	451 - 468

総合結果
滋賀医科大学 4対8 浜松医科大学 0引き分け
※通算(滋賀医科大学) 18勝14敗5引き分け



浜松医科大学との交流会に参加して

委員長 医学科第4学年 伊藤 貴 優

まず初めに、交流会を開催するに当たりご尽力いただきました先生方、職員の方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

今年で37回目を迎えるこの交流会ですが、本学の学生が浜松医科大学の学生に呼びかけて始まった、という経緯があります。本学と浜松医科大学とは同じ1974年に設置され、医学の分野でも良いライバル関係にあると聞いています。そのような関係の学校同士の行事に携わらせていただいたこと、そして学校全体での行事でありながらあくまで学生主体のこの交流会に委員として携わらせていただき、よい経験をさせていただいたことをうれしく思います。

今年は浜松医科大学での開催となり私は主に本学と浜松医科大学の往復バスの手配を担当いたしました。果たして全体で何人が参加するのか、バス代はいくらまでに抑えられるのか、バスの配車をどのようにすれば良いかなどかなり頭を悩ませ

ましたが、無事終わらせることができほっとしました。

浜松医科大学との交流会を通して、私は学生間のつながりの大切さを感じました。当日に至るまで、本学の各部活の主将や先輩方、浜松医科大学の実行委員の方達にはお世話になりました。このような繋がりには将来に生かされていくと思うので大切にしていきたいと思います。

2日間大きな事故もなく、無事に交流会を終えることができ、ご協力くださった皆様には改めてお礼申し上げます。また後輩たちには、来年以降も素晴らしい交流会を開催し、この伝統を絶やさず続けていけるように頑張ってもらいたいと思います。



空手道部主将 医学科第4学年 北岸 弥寿朗

まず始めに、第37回浜松医科大学・滋賀医科大学による交流会を開催するに当たりご尽力いただきました先生方、学生課の職員の方々にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

今年で37回目になるという大変歴史のあるこの交流会ですが、自分は体育会長の代理という形でこの交流会に関わらせて頂きました。1年生から参加させて頂いているこの交流会ですが、今回は今まで以上に歴史の深さなどが感じることができ、このような機会を与えて頂いたことには大変感謝しております。

今年は浜松医科大学の主催であり、自分に与えられた役割は壮行会、開会式、閉会式で挨拶をすることでした。特に壮行会での挨拶は、浜松医科大学に行く前にみんなを盛り上げて士気を高めていく必要性のある重要な挨拶でしたが、あまり人前で話す経験が無かったため思うようにみんなを盛り上げていくことができなかつたことが悔やま

れました。ただ自分が盛り上げるまでもなく、皆、交流会が楽しみで活気にあふれるにぎやかな壮行会だったと思います。

滋賀では天気が悪かったのですが、浜松では素晴らしい天気でもどクラブも充実した2日間を過ごすことができましたと思います。交流戦の試合結果自体は滋賀医科大学の惨敗でしたが、この交流会の意義は学生同士の交流を通して有意義な時間を共有できることにあり、その目的は達成できたと思います。その証拠に自分は今回、壮行会、開会式、閉会式と皆の前に出て、多くの人の表情を見渡せる位置にいましたが、誰もがこの交流会を楽しんでいることがひしひしと感ずることができました。自分はこのような素晴らしい行事を今後も続けていくべきであると強く感じました。

多くの方々のご協力のおかげで、2日間大きな事故もなく無事交流会を終えることができ、大変感謝しております。このような素晴らしい体験を、今後は是非後輩たちにも経験して欲しいと思うので、後輩たちにはこの歴史ある交流会を来年以降も開催できるよう頑張してほしいと思いました。



平成24年度 新入生研修

4月6・7日の両日、平成24年度新入生宿泊研修が、医学科・看護学科の新入生及び引率教職員総勢約190名の参加により近江八幡休暇村等にて行なわれました。

初日は春らしからぬあいにくの空模様でしたが、大自然の中での飯盒炊爨に始まり、午後からは「滋賀の魅力」、滋賀県消費生活センター及び弁護士の方を講師に招いての「リスクマネジメントについて」、小川講師による「保健管理センターについて」の講演と、学科別・クラス別懇談会が行われました。2日目は瀧川看護学科長による「煙害等」の講演、人権学習、陶芸体験などがあり、二日間を共に過ごした新入生はお互いに親交を深め、大学生生活のスタートを切りました。

新入生研修に参加して

医学科第1学年 竹田 有沙

四月六日・七日に私たちは新入生宿泊研修に行ってきました。天候に不安が残る始まりでしたが、激しい雨に見舞われることもなく、無事に楽しく宿泊研修を終えることができました。飯盒炊爨では、私の班は大変おいしいカレーを作ることができました。風が強く、カレーを皿についだりお茶を取りに行っている間にカレーが冷めてしまったこと、煙で服や髪が焦しあげられて焦げ臭くなってしまったのは残念でしたが、班全体で協力して楽しい時間を過ごせました。

クラス懇親会では、多くの人の自己紹介を一気に聞いて少し混乱してしまいましたが、多年代にわたって、多種多様な背景をもつ方々が集まるという滋賀医大の魅力を改めて感じました。

お楽しみ企画である陶芸体験は思った通り

に作品を形にするのがなかなか難しかったのですが、やっているうちに熱中していき、二つ目の作品へと手を伸ばす方もたくさんいました。

最後に、二日間をかけて滋賀県の魅力や煙害・麻薬への注意喚起、人権に関して等様々な興味深い講演会を聴いて、私たちは滋賀医大生としての自覚を目覚めさせる足がかりとすることができたと思います。これからは宿泊研修でできた新しい友人とともに、学業や課外活動に精一杯取り組んでいきたいと思っています。



新入生研修に参加して

医学科第1学年 北野 英

入学後、すぐの一泊研修。戸惑いながらも大変のどかな近江八幡休暇村に着き、いざ合宿が始まってみると、小雨の降る中、班の人たちと協力して飯盒炊飯をしているうちに、最初あったぎこちなさも、あっという間になくなっていました。

滋賀の魅力についての講義では、母の実家が滋賀である私にとって、子供のころから身近な滋賀の歴史や自然をより詳しく知ることができました。紹介された観光地には、知らない場所も多く、ぜひ在学中に訪れたいと思っています。リスクマネジメントの講義では、ニュースで耳にする危険をより身近に感じることができました。大学生＝オトナとしても、更に自覚が必要だと実感しました。

懇談会以降就寝まで、多くの方々と知り合いになり楽しい時間を持てたことはとてもよかったです。

翌日は煙害と人権についての講義を受けま

した。煙害については、高校のころに学んだ内容より深く喫煙のリスクについて学びました。私は、やはり今後も喫煙はしないと思います。

また、人権を尊重するということは誰しも子供のころから教えられていますが、それを実行することの難しさを再認識することができた講義でした。

陶芸の里では水茎焼きに挑戦し、少し時間はかかりましたが最後にいい思い出を作ることができました。

今回の合宿を通じて、私は多くの同級生たちと交流をもつことができ、滋賀医大生としての一歩を踏み出せたと思います。



看護学科第1学年 湯浅 慧莉子

私は、入学後すぐに1泊2日の研修旅行があると知った時、正直なところ気分が沈んでしまいました。始まったばかりの大学生活で緊張感や不安が大きく、まだ話したこともない人がほとんどという中、単純に喜ばせませんでした。とはいうものの、前日はぐっすり眠り、一抹の不安と戸惑いの気持ちを抱きながらの研修旅行が始まりました。

目的地に到着してすぐの、寒さと煙の中で



のカレーづくり。初めて看護学科の人全員と顔を合わせた懇談会。自己紹介の場面では、ひとりひとりの個性的なコメントを聞きながら、これから、このメンバーで4年間を過ごすのだと、初めて大学生活のスタートラインに立った実感を噛みしめることができました。そして、滋賀県の紹介や陶芸の里での作品作り。種々の講義やレクリエーションを通し、学科を越えていろいろな人と話し、同じ空気の中で時間を過ごしました。出発当初、私の中にあった緊張感や不安は、気づかぬうちに安堵感へと変化していきました。

この2日間の研修旅行は、友達作りの場となったことは勿論、これからどのように生活すべきであるのかを改めて考えるきっかけを私に与えてくれました。この素晴らしい出会いを大切に、これから大学生として充実した日々を積み上げていきたいと思っています。

新入生研修に参加して

看護学科第1学年 野田 晋太郎

国民休暇村に到着してバスから降りると、眼下に琵琶湖が広がっていました。近江八幡市在住の僕にとっては見慣れた景色でしたが、県外から来られた方にとっては新鮮なものだったと思います。

一日目午前の飯盒炊爨は悪天候の中での実施でした。火を起こして調理や冷水での食器洗いは想像していたよりも大変で、普段何気なく行っていることが、いかに便利で幸せなことであったかを改めて実感させられました。それとともに、班員で協力することの大切さも感じました。午後、学生が陥りやすい問題や保健管理センターについてなど今後のためになるような話があった後、学科、クラス別に懇談会がありました。今までわからなかったクラ



スメイトの人物や出身を知ることができた良い機会でした。夕食、フリータイムでは医学科の方とも交流ができて、大きく人脈を広げられました。

二日目午前から瀧川教授による煙害についての講義があり、たばこの恐ろしさについて詳しく知ることができました。講義の雰囲気も少しつかむことができました。人権についての講義は佐藤弘明氏が自身の経験から学んだことや歌や昔話を盛り込んで話して下さり、人権についての教養を深めることができました。午後から最後のイベントである作陶がありました。各々好きなように器を作ることができ、研修の締めくくりに良い思い出づくりができたと思います。

この二日間は普段できない貴重な体験ができて、尚且つ、多くの人と親睦が深められた充実した二日間でした。

看護学科第3年次編入生 神徳 千尋

今回の新入生の一泊二日宿泊研修では、これから学生生活を送るうえでの心構えが出来たと思います。一日目の飯盒炊爨では、気温も低く厳しい天候のなかでしたが、同じ班の人達と協力してカレー作りをすることで新入生同士で打ち解けあうことが出来ました。滋賀の魅力についての講演では滋賀県出身でない私にとってとても為になる講演となりました。学生のリスクマネジメントについて、保健管理センターについてでは今後どのようなことに気を付けていく必要があるのか事前に学ぶことが出来たのでトラブルにならないように注意を払っていきたいと思いました。その後の看護学科の懇談会では一人一分程度の自己紹介をしたのですが、編入生だけでなく一回生の人達を知ることが出来て良かったです。皆一人一人個性のある自己紹介でした。

二日目の午前中は煙害等については煙害の影響について改めて認識させられました。里親学生支援では、地域医療の重要性を実感

したとともにこの二年間で地域医療についてさらに深く学んでいきたいと思いました。人権学習では、話だけ

だけでなくいくつか歌を歌って下さり、その歌詞から人権の大切さについて学ぶことが出来ました。午後からは陶芸をしたのですが、陶芸の先生の丁寧な指導によりとても良い作品となりました。また、陶芸というひとつの芸術に皆で取り組むことでさらに学生間の交流を深められたと思います。一泊二日という短い期間での宿泊研修でしたが、とても充実しており今後学生生活を送るうえでのよい経験となりました。今回学んだことを忘れることなく、滋賀医科大学での二年間を有意義なものとなるよう過ごしていきたいです。



リーダーズ研修

本学ではサークル活動を有意義に発展させるため、リーダーとしての自覚と認識を高めると共に、各サークルの相互理解を深めることを目的とし、毎年、リーダーズ研修を開催しています。

今年は3月7日(水)の13時からクリエイティブモチベーションセンターにおいて、体育会系、文化会系の各課外活動団体の主将等の代表者38名の参加の下、班別討議でのアドバイザーとして中澤拓也脳神経外科学講座准教授他計10名の教員が参加し実施しました。

当日は服部副学長の開講挨拶にはじまり、本学第2期生の江口豊救急集中治療医学講座教授による急性アルコール中毒や救急蘇生に関する講演や、同じく卒業生の相見解剖学講座准教授、向所病理学講座准教授による講演があり、また班別懇談会では自ら提案したテーマについて各班でクラブ運営の現状や問題点について話し合うなど充実した内容の半日間となりました。

リーダーズ研修に参加して

文化会会長 医学科第4学年 塚本 紗 千

毎年恒例のリーダーズ研修が、今年も新たな文化会体育会の部活動代表者により盛況に行われました。服部副学長のご挨拶により始まり、江口教授による救急蘇生講習、班別討論、向所准教授と相見准教授によるご講演、そして最後の交流会に至るまで内容の濃い研修となりました。

救急蘇生講習では、主に飲酒に関する内容を江口教授より直々にご指導頂きました。アルコールに纏わるトラブルを回避する方法や、AEDの使用方法など部活動中に起こりうる緊急事態への対処法は皆大いに関心を持っているトピックスであり、部の責任者として大変勉強になりました。



班別討論では各班で提示された課題に沿った議論がなされました。OB・OGとの繋がりや、部活の中でのトラブルに関する事など、様々な課題に対して各部の代表者の意見が聞ける貴重な機会でしたので、どの班でも熱い議論が交わされていました。他の部の状況や取り組みを知ることも出来て、各自が部活の代表者としてのモチベーションをさらに高めることが出来ました。

向所先生には論語を交えつつ、リーダーとはどうあるべき者かについてお話頂きました。また、相見先生には部活動をより良いものにしていく責任者としての考え方をご指導頂きました。普段は講義でお世話になっている先生方の部活動に対する捉え方は、大変興味深い内容であり貴重な体験になりました。

今回の研修はほんの数時間でしたが、参加者全員の部活に対する意識を高め、リーダーとしてさらなる部の発展と向上を目指す良いきっかけとなりました。研修を立ち上げて下さった関係者の方々及び、ご協力を賜りました先生方に文化会長として厚く御礼申し上げます。



医師・保健師・助産師・看護師国家試験の結果

第106回医師、第98回保健師、第95回助産師、第101回看護師の各国家試験の合格発表が平成24年3月に行われ、滋賀医科大学の合格状況は次のとおりでした。助産師は2年連続、看護師は3年連続で新卒者の合格率は100%でした。なお、いずれの合格率も全国平均を大きく上回る結果となりました。

第106回 医師国家試験

平成24年2月11日(土)・12日(日)・13日(月)実施

	卒業 者	受験 者	合格 者	合格 率	備 考
新 卒 者	87名	85名	83名	97.6%	全国 受験者 8,521名 合格者 7,688名 合格率 90.2%
既 卒 者		1名	0名	0.0%	
計		86名	83名	96.5%	

参考 前回 第105回医師国家試験の結果

	卒業 者	受験 者	合格 者	合格 率	備 考
新 卒 者	104名	104名	103名	99.0%	全国 受験者 8,611名 合格者 7,686名 合格率 89.3%
既 卒 者		1名	1名	100.0%	
計		105名	104名	99.0%	

第98回 保健師国家試験

平成24年2月17日(金)実施

	卒業 者	受験 者	合格 者	合格 率	備 考
新 卒 者	72名	69名	68名	98.6%	合格率(全国) 86.0%
既 卒 者		1名	0名	0.0%	
計		70名	68名	97.1%	

参考 前回 第97回保健師国家試験の結果

	卒業 者	受験 者	合格 者	合格 率	備 考
新 卒 者	68名	66名	66名	100.0%	合格率(全国) 86.3%
既 卒 者		1名	1名	100.0%	
計		67名	67名	100.0%	

第95回 助産師国家試験

平成24年2月16日(木)実施

	受験 者	合格 者	合格 率	備 考
新 卒 者	8名	8名	100.0%	合格率(全国) 95.0%
既 卒 者	0名	0名	—	
計	8名	8名	100.0%	

参考 前回 第94回助産師国家試験の結果

	受験 者	合格 者	合格 率	備 考
新 卒 者	12名	12名	100.0%	合格率(全国) 97.2%
既 卒 者	4名	4名	100.0%	
計	16名	16名	100.0%	

第101回 看護師国家試験

平成24年2月19日(日)実施

	受験 者	合格 者	合格 率	備 考
新 卒 者	61名	61名	100.0%	合格率(全国) 90.1%
既 卒 者	0名	0名	—	
計	61名	61名	100.0%	

(注) 新卒者中10名は3年次編入学生で、既に合格済み。

参考 前回 第100回看護師国家試験の結果

	受験 者	合格 者	合格 率	備 考
新 卒 者	58名	58名	100.0%	合格率(全国) 91.8%
既 卒 者	0名	0名	—	
計	58名	58名	100.0%	



新入生歓迎企画



私がすすめるこの本2012



新入生・新採職員のみなさん、滋賀医大へようこそ！

図書館では「新入生歓迎企画」として、これから本学で学んでいただくみなさんのために教職員8名の方々に推薦図書およびコメントを寄せていただく企画展示を実施しました。

(4月3日～5月31日) 紹介した図書はすべて図書館で所蔵していますので、展示期間中に手に取れなかった方も、ぜひ一度ご覧ください。



図書館長
マルチメディアセンター長
堀池喜八郎 教授
分子生理化学

●ヤノマミ (国分 拓 著 日本放送出版協会)

ヤノマミとは奥アマソンの先住民の一つで、文明による厄災から免れることができた奇跡的な部族であり、1万年にわたり独自の原始的な生活をしている。NHKのディレクターがそのヤノマミ族と150日の長き同居生活をし、それを記録した衝撃的な現地報告である(NHKで放映)。集落では「年子」がない。どうしてか。生まれたばかりの赤ん坊は人間ではなく精霊であるから。この理由の意味は本書で。ヒトについて考えてしまう本である。大宅壮一ノンフィクション賞や早稲田ジャーナリズム大賞受賞。「本の雑誌」が選ぶベストテン第3位(2010年)。

●世界屠畜紀行 (内澤 旬子 著 角川書店)

僕らは従属栄養生物で、(必須)アミノ酸を摂取するため、肉(タンパク質)を食べる。その肉はどうやって食卓まで来たのか。牛・豚・ラクダ・羊・犬・ヤギが食肉になるまでの、世界中の屠畜の現場を取材したイラスト付きルポルタージュである。この本を読んで、感謝しながらガツガツと肉を食らおう。

●逝きし世の面影 (渡辺京二 著 平凡社)

名著である。幕末から明治にかけて外国人によって書かれた、当時の日本の庶民の生活に関する膨大な記録をもとにして、僕らが失ってしまった19世紀日本という「逝きし」良き「世」を復活させた本である。日本近代が失ったものは何か。平成の今、必読の書である。分厚い文庫ではあるが、拾い読みでよい、目を通してほしい一冊である。和辻哲郎文化賞受賞。

●ある明治人の記録 (石光真人 著 中央公論社)

会津人である柴五郎による、朝敵(敗者)の人々の維新後の生活を記した、賊軍からみた維新の裏面史の本である。薩長の明治政府(官軍)が何をやったのか。何をしなかったのか。日本近代化の過程に何があったのか。心が痛くなる本である。震災後の今の東北の状況が想起されてしまう。



加藤 圭子 教授
基礎看護学・栄養

●On Caring

(Mayeroff, Milton 著 Harper Perennial)
翻訳版も出版されていますが、人のケアの本質について易しい英文で書かれていますのでぜひ英文で読んでほしい1冊です。

●こころの旅

(神谷美恵子 著 みすず書房)
青年期の複雑な心を見つめるよすがになると思います。

●死を見つめる心：ガンとたたかった十年間

(岸本英夫 著 講談社)
宗教学者という立場で自分の死を客観的に見つめ、ガンとの壮絶な闘病生活について書かれています。

●寡黙なる巨人 (多田富雄 著 集英社)

多田先生は、世界的な免疫学者です。脳卒中で倒れられ、口でペンを加えて執筆活動を続けてこられました。障害を背負ったことによって新たな自己を確立したと言われていました。やっぱり名者だと思えます。



大路 正人 教授
眼科学

●医療崩壊：「立ち去り型サボタージュ」とは何か

(小松秀樹 著 朝日新聞社)
医療崩壊について問題点を指摘し、解決策を提案している。医師の常識と患者の常識が異なっていることを理解することも重要である。

●失敗の本質：日本軍の組織論的研究

(戸部良一 著 中央公論社)

日本軍の敗北を分析し、反面教師として活用したい本である。昨年の東日本大震災における福島第一原子力発電所で起こった事故にも通じるものがある。

●経営はロマンだ！

(小倉昌男 著 日本経済新聞社)
クロネコヤマトの宅急便を生み出した特筆すべき経営者であるとともに障害者の支援にも力を入れている著者自身による著書である。当時実現不可能と思われていた宅急便を困難を克服しながら実現する話である。大手企業相手の運送では得られなかった顧客からの「感謝」が成功の鍵の一つであったことが印象的であった。





北原 照代 講師
衛生学

●病院の言葉を分かりやすく：工夫の提案

(国立国語研究所「病院の言葉」委員会 編 勁草書房)

「インフォームド・コンセント」(医療に関する十分な説明と同意)という考え方と実践はすでに定着していると言われてはいます。しかし、この本を読むと、普段の診療で一般的に使われている言葉がいかに患者さんにとって「わかりにくい言葉」であるかに気づきます。解決のヒントもコラムも豊富で、学生のうちには是非読んでもらいたい本です。

●手話知らなくてすみません：手話を学ぶ人たちに贈る11章

(小出新一 著 全国手話通訳問題研究会)

著者は新米手話通訳者としての体験をユーモアあふれる文章で書いているのですが、そこには社会全体に対するさまざまな問題提起が込められています。手話をコミュニケーション手段としている聴覚障害者に対し医療者が配慮すべきことは何か。学生のときに読んだこの本は、私の滋賀医大での研究・教育の原点ともいえる1冊です。



田中 俊宏 教授
皮膚科学

●僕は君たちに武器を配りたい

(瀧本哲史 著 講談社)

学問の情熱に燃えて入学された新入生諸君にはあまりふさわしくないかもしれませんが。知り合いが、「若い奴らに受けてみたいよ」と教えてくれたので読みました。

●武器としての決断思考

(瀧本哲史 著 星海社)

先の本をより具体的に書いたハウツーと考えれば、この2冊で一つと思います。結論を言ってしまうと、リベラルアート(一般教養)を身につけないと金儲けは出来ない!というミもフタも無い話しが、理由をつけて分析的に書いてあります。



細川 数子 師長
看護部・医療情報

●石巻赤十字病院の100日間：東日本大震災 医師・看護師・病院職員たちの苦闘の記録

(石巻赤十字病院十由井りょう子 小学館)

2011年3月11日の地震発生から分刻みで残された記録に基づいて書かれています。自然の災害は避けることができませんので、医療に携わる人として今後のために読んで頂きたい本です。

●出世花 (高田 郁 著 角川春樹事務所)

江戸時代に若い娘が湯灌を生業に、死に近く人や残された人の心に思いを寄せた看取りや湯灌をされており、現代での終末期ケア～お見送りにつながり考えさせられる内容です。



吉田不空雄 教授
物理学

●美の幾何学

(伏見康治・安野光雅・中村義作 中央公論社)

著者の一人は統計力学でのHusimi treeなどで知られる理論物理学者である。しかし、内容は難解さと無縁で、専門の全く異なる3人が身近な模様を幾何学的にわかりやすく解説している。今読み返してみても幾何の基本的なことが書かれていて良書だと思う。考えてみれば公園の敷石など模様はどこにでもある。散歩がてら自分の好きなものに出くわしてしばし時を忘れるのもまた楽しいことではないか。



岡村 富夫 教授
薬理学

●くすりの発明・発見史

(岡部 進 著 南山堂)

知己の薬理学者が書いた本で、薬の発見の歴史および発見者の人生に関するエピソードが紹介されています。薬理学者は新しい薬を作ることと出来た薬の作用機序を明らかにすることを目的として研究しています。昔の薬理学者は今から考えるといろんな意味で問題の多い実験をしていますが、その成果が今日の医療に役立っています。読み物として楽しめると思います。



●Goodman and Gilman's The Pharmacological Basis of Therapeutics

(Goodman, Louis Sanford 著 McGraw-Hill)

薬理学における世界標準の教科書です。国を問わず、ほとんどの教科書はこの本を参考にして書かれています。ほぼ5年ごとに改訂され、現在は12版になります。この版からDVDが付録になり、掲載されている図表が収録されています。全部読もうとは思わないで下さい。新入生にはこういう本が有るということを知ってもらっただけで結構です。

●宇宙をかき乱すべきか：ダイソン自伝

(F.Dyson 著 ダイヤモンド社)

物理学者ダイソンの自伝である。記者は文科系の教育を受けた方、理科系でも生物系や工学系の方々に広く読んでもらいたいと述べている。福島原発事故で明らかになったように科学と社会の関わりは複雑である。この本では、核兵器、宇宙開発から言語多様性、生物の進化まで、人類の未来の問題が独特の考え方で論じられている。読みごたえがあり、大変参考になる本である。

●働かないアリに意義がある

(長谷川英祐 著 メディアファクトリー)

優れた人だけで組織を作っても遊ぶ人がその中に必ず現れる、とどこかで聞いた記憶がある。パーキンソンの法則、ピーターの法則と呼ばれるような法則の類であろうか。この本ではアリ社会で働いていないアリもいることの生物学的な意味が実験事実から説明されている。説得力があり、集団のなかでの個人のあり方を考えさせておもしろい本である。

国立病院機構
滋賀病院だより

新病棟建設着工と 臨床実習の開始

総合外科学講座 教授 来見良誠

新病棟建設始まる

滋賀病院は、平成23年4月には120床でしたが、閉鎖していた2病棟をオープンして、入院病棟数は3病棟から5病棟になり、平成24年4月には220床になりました。これまでは、現在ある病棟を整備することにより増床してまいりましたが、本年4月より7階建ての新病棟の建設が開始され、平成25年4月には6病棟320床を有する東近江医療圏の中核病院となります。

臨床実習開始までの経緯

東近江医療圏の再生計画における中核病院としての国立病院機構滋賀病院において、平成24年4月より滋賀医科大学医学部医学科5学年の臨床実習が開始されました。継続性のある人材確保は人材育成策によってのみ成就するものと考え、臨床実習の導入を平成23年度より計画し、学長はじめ執行部の強い指導力によって実現したものであります。

現在220床の滋賀病院では、大学病院ではできない地域密着型の臨床実習を企画しています。数少ないスタッフで毎日5名の医学生を担当することは一見困難なように見えますが、日常の診療を細かく見学してもらうことにより、臨場感あふれる医療現場を体験できるようにカリキュラムを構成しています。

臨床実習の実際

学生実習の一日を紹介します。朝7時30分、大学に集合し貸切のジャンボタクシーで、草津田上インターから八日市インターまで名神高速道路を利用して、約30分間で滋賀病院に到着します。到着するとすぐに総合内科のカンファレンスに参加し、前日の当直時間帯での受診患者についての詳細な検討を体験します。カンファレンス終了後は、一人ずつ異なる診療科をローテーションします。外科・呼吸器外科・整形外科・産科・婦人科・口腔外科・皮膚科・眼科・麻酔科・検査科・消化器内科・救急科・循環器内科・呼吸器内科・神経内科・内科・小児科を10ブロックに分けて

ローテーションしています。2週間の間にすべてのブロックをローテーションすることにより、滋賀病院における医療を体験してもらうことになっています。この実習の特徴は2週間ですべての診療科を経験できることと、病院の規模が大学病院の半分程度であるため、病院の全体像を把握するのに適している点が挙げられます。現在までにすでに5グループの学生(25人)が当院での実習に参加していますが、満足度は高いと評価されています。

第二教育病院としての位置づけ

臨床実習は昨年までは、5学年の医学生100名を20組に分け、附属病院の診療科・診療部を20のグループに分割して、ローテーションしていましたが、21番目のグループとして国立滋賀病院を加えることにより地域医療を中心とした臨床実習を体験できるようになりました。大学病院には通院できないような高齢者の診療や救急医療などを体験できる第二教育病院として位置づけられています。

研修医の育成を目的とする協力型臨床研修病院として研修医の指導を行っていますが、更に整備を進め、管理型研修指定病院を現在申請しています。また、本年4月より、がん診療連携支援病院として大学病院との連携を更に強化しています。現在4名の後期研修医が当院で勤務しており、臨床実習、初期臨床研修のほかに後期臨床研修にも力を注ぎ、第二教育病院としての機能の充実を図っています。



滋賀病院に赴任して半年間の感想



総合外科学講座 講師
菊地 克久

私は平成23年10月から整形外科医長として出向致しました。東近江医療圏内では現在常勤の整形外科医師数が十人少しと、十年前の約半分になり、特に医師の減少が深刻な東近江市内の国公立3病院には、数年整形外科の常勤医がいない状態でした。一人常勤ではありますが、幸い大学より森幹士整形外科講師含め、週2回一人ずつ外来・手術等に定期的に手伝いに来て頂いています。一人で診療する際にも独りよがりな診療にならないように、困った症例については相談できますし、専門外の脊椎患者の手術等は執刀を御願ひしています。

手術としては、局所麻酔の手術以外は、大部分当院麻酔科医長の藤野先生に大変お世話になっています。術後鎮痛等で大変工夫して頂き、多い骨折や脊椎症例の手術後も、“快適な”周術期で私や患者さんは非常に助かっています。救急医療の点では、以前は二次救急医療体制が脆弱となり、近江八幡市立総合医療センターへの負担が大きくなっていましたが、救急科医長の五月女先生を先頭に奮闘され、徐々に救急搬送は増加しております。おかげで土日の当直日は二十～三十数名の患者と対応する事になり、次の日に仕事の日勤である日は辛いものがありますが、何とか皆に支えてもらってこなしております。

当院は井上病院長、来見・辻川両副院長の下で、各科の医師がそれぞれ朝早くからそれぞれ走り回っておられます。当院勤務医師は殆どが滋賀医大出身或いは入局者にて知っている方も多く、身内の感じとても仕事がやりやすい状態です。(いわば滋賀医大第二附属病院?のような感じです。)内科外科及び他の科も含めて話しやすく、整形以外のわからない事もすぐ指導頂けるといふ点で、他の科との連携もとれている病院といえます。

平日はどうしても外来診療の後に手術という1日の流れの為、病棟にいる時間が短くなりがち

で、婦長を始めとする病棟スタッフへの依存度は大変高くなり、気がついた事は些細な事でも報告して頂くシステムになっています。病棟回診はカルテを持って回る時間が元より無い為、顔回診になりますが、採血やX線写真等の検査結果が出る度に簡単にでも説明し、本人・家族に安心してもらい、同意を得た上で新たな検査・治療に進むようにしています。

このような医局や周りからのバックアップもあって、この8カ月大過なく過ごせたと考えております。平成25年4月の新病棟稼働時には320床の東近江医療センターとして再スタート致しますが、その時は医局からの整形外科常勤医も増えてそれに備える形を予定しています。

今回の東近江地域の医療体制整備の支援に特色あるものとして、地域医療の①医師派遣・確保・提供システム、②連携ネットワークを、それぞれ如何に実効ある形で確立していくか、という事があります。寄附講座のスタッフが学生教育に深く関わって本来の地域医療を教える、という形になっているところは、国内ではまだ僅かのようなのです。

例えばリハビリの点でも、東近江医療圏は滋賀県下で療養病床の在院日数が一番長く、リハビリ科として機能できる医師自体もごく僅かとお聞きしています。三方よし研究会等一部を除いて、急性期から維持期までの地域ネットワークがまだ不十分であり、自立に向けた専門家の関わりも少ない状況であるようです。(「生活のことは介護・福祉に任せておけばよい」という旧態依然とした医療観をもつ先生もまだまだ多いと思います。今後は大学医学部で学生の頭が柔軟な早期から、卒前教育として地域リハビリの講義をしてもらうことを期待します。)

最後に学生及び研修医に対してですが、大学病院で多くの症例に携わり、最新医療を追求したり、学問的な研修を進める事も重要ですが、時には地域医療に携わり一人一人の患者と密に接して人間関係を重視した医療を経験する事も医師として大切な事と考えます。今後当院に限らず地域医療に携わる機会には、それぞれ今までと違った意味での研修が出来るものと思います。

滋賀病院としては、出身医大にも貢献できるという充実感を感じながら、総合臨床医を目指す研修医や、地域医療再生に尽力しようという卒業生が今後も来て頂ければ、と願ってやみません。

インフォメーション

平成23年度 卒業式

平成23年度本学卒業式は、去る3月9日（金）午前10時から本学体育館において挙行され、学長から次のとおり告辞がありました。

告 辞

学 長 馬 場 忠 雄

平成23年度滋賀医科大学卒業式を挙行するにあたり、ご多忙の中、また、お足もとの悪い中、ご列席を賜りましたご来賓の皆様、ご父兄の皆様ならびに教職員の皆様に御礼申し上げます。

本日晴れて卒業の日を迎えられた医学科87名、看護学科72名の諸君に心よりお祝い申し上げます。また、諸君の学生生活を支えてこられたご家族の方々にお慶び申し上げます。

平成16年に新たに国立大学法人として「地域に支えられ、世界に挑戦する大学」を目指し、第一期6年間の中期目標と計画を教職員と共に一体となって取り組み、着実に実績を積み上げました。医学科においては、文部科学省の公募事業に本学が提案した「一般市民参加型全人的医療教育プログラム」が採択され、諸君らの学年から、患者宅への訪問、市民とのシンポジウムなど、地域の方々に教育の一部に参画いただきました。また、模擬患者さんによる学生の客観的臨床能力の向上や診療所・関連病院、施設での臨床実習や臨地実習においても、地域の方々のご協力をえて、地域基盤型教育は充実してきました。

本学は、本学としての使命を果たすべく、全構成員が一致して第二期中期目標のSUMSプロジェクト2010-2015「次世代を担う人材育成と医療科学・技術の創出」に取り組んでいます。国立大学を取り巻く環境は年々厳しさを増し、今、国立大学として存在することの意義が問われています。本学としても地域のリージョナルセンターとして、またナショナルセンター機能を持つ大学として、この間に答えることが強く求められています。

本学附属病院の診療活動や地域連携などは、リージョナルセンターとして、高く評価されています。すなわち、病院の再開発により手術場、NICU、ICUなどの機能が充実し、これに応じて、心臓血管外科の手術は全国的にも高い評価がえられています。その他、内視鏡を用いた手術や網膜手術など高度で低侵襲な医療により、地域医療の質の向上に貢献しています。また、滋賀県の

高度がん診療拠点病院、地域がん拠点病院、災害拠点病院など多くの指定病院であります。地域医療に関しては、地域医療再生計画のもとに、国立病院機構滋賀病院に、総合内科学講座と総合外科学講座をおき、診療体制を整え、地域医療を行うと共に、平成24年度から本学および本学附属病院と連携した学生の臨床実習に、平成25年度から研修医の総合医としての研修を担当することになります。さらに、地域の高校との連携や公開講座を通して健康、医療、福祉に関する情報を積極的に提供しています。平成24年度には、開放型ミュージアムが完成することになり、地域医療関係者の教育にも活用できることとなります。

国の計画養成である医師については、地域医療の充実や研究医の不足と対応して、入学定員増が計られ、本学では117名となっています。ここ数年、医師国家試験の合格率は良い成績を収めており、注目されています。また、看護師、保健師、助産師の国家試験合格率はほぼ100%であります。看護教育過程も平成24年度から、より専門職として教育過程の充実を目指し、看護師、保健師と助産師課程がそれぞれ改正され、本学では、3年生で保健師30名、助産師8名の選択制となります。取得した資格を十分に生かした医療活動が求められます。

ナショナルセンター機能としては、研究面で寄与できればと考えています。サルを用いた再生医療は、他大学や企業との共同で活発に行わ



れ、また、インフルエンザワクチンの開発や遺伝的に制御されたサルを用いたがん免疫の研究、MRによるナノダイヤモンドを用いた画像診断の応用、神経難病であるアルツハイマー病の早期診断法の確立、オーダーメイド医療によるがん医療や循環器疾患の展開、医工連携によるMR下対応の医療機器やマイクロ波機器の開発など積極的に行われています。そして、平成24年度予算では、念願であった疫学研究拠点の設置が認められ、今後、わが国初の疫学研究センターとしてソフト面を含め充実し、東南アジアとの共同研究センターを目指し、その第一歩を踏み出すこととなります。

卒業生諸君も、今までに身につけた患者の視点での医療を実践し、充実した初期研修を行い、本学附属病院で先進医療と高度医療を修得できる実力をつけて帰ってきて下さい。また、本学の研究体制に参画し、ナショナルセンター機能の一翼を担える研究が生まれることを期待しています。卒業する諸君は、目の前の患者さんを救えます。しかし、優れた研究成果は、その1,000倍以上の患者さんを救えるすばらしいものとなります。

大学は在学中だけのものではなく、同窓生にも新しい知識や技術を提供するところであり、絶えず関連を持ち続けてください。湖医会と共催して、第一回ホームカミングデイを今年の1月8日、9日の両日にわたって、本学で開催し、盛会に有意義な会となりました。是非、諸君も湖医会活動に深い関心を持ち、本学の卒業生としての自覚と自信や誇りを持って、活躍してくれることを希望します。

医療に携わる者は、常に患者さんの生活の質QOLの向上につながる努力を怠ることなく、そして、忙しいなかにも、科学的根拠に基づく冷静な行動が求められます。

昨年の3月11日に東日本大震災が発生し、死者15,842人と行方不明者3,481人と莫大な被害をこうむり、今なお福島原子力発電所事故による放射能汚染が続いており、一日も早い復興が待たれています。本学から、当日直ちに救急医療チームが、それ以降、県の医療支援、また国立大学法人やオールジャパンの被災地医療支援委員会の一員として、3月30日までボランティアでいろいろな医療支援に延67名が参加し、他大学や地元の方々々と協力し活動いたしました。大学としても大変感謝いたしております。

菅野武医師32才は、宮城県南三陸町の公立志津川病院の内科に勤務中、経験したことのない大きな揺れのあと、停電、大津波警報、そして恐

怖の大津波が押し寄せ、全てがのみ込まれ、5階に高齢で寝たきりや移動に介助が必要な患者さんを病院職員と共に避難、しかし、4階の天井近くまで水が押し寄せ、全ての患者さんを運ぶことができず、その後も救助を待つまで不安と寒さに震えながら寄り添うことしかできなかった。朝を迎えるまでに7名が息を引き取った。翌日の午後2時ごろにヘリコプターが屋上につき、重症の患者さんは次々と救出され、3日目に最後の患者さんに付き添って、ヘリコプターが屋上から浮き上がって、眼下にすべてを流された町とわずかに残った病院を見たとき、初めて自分が生き残れたと実感し、石巻赤十字病院に運ばれる途中、涙が止まらなかった。長男の誕生にもかかわらず、再び看護師や地域の方々と共に、避難所での厳しい医療活動に入りました。その医療活動により、2011年4月21日に米国タイム誌の2011年度「世界で最も影響力のある100人」に、福島県南相馬市長の桜井勝延氏とともに選ばれました。菅野武氏は、これらの経験を河北選書で「寄り添い支える 若き内科医の3.11」として出版しました。

菅野医師は、当時を振り返って自分は特別な能力をもった人間でもなく、普通のむしろ臆病な自分でも、自分の人生に後悔しないように、出来ることを探し、懸命に努力することで、明日への希望が湧き、今をより力強く生きることができると記しています。困難な状況におかれた時こそ、医療人としての役割を冷静に、着実に使命を果たすことで、皆が安心する状況を作り出すことができるのです。

国家試験に合格した卒業生は、国家認定の資格をもった医療人として働くことができます。しかし、その資格は大学で学んだ知識や技能を基に、さらに日々の厳しい研修で、知と技に磨きをかけて、はじめて生きたものとなります。そして、医療人には、倫理観が強く求められ、倫理観を疑う行動は、たとえ知識やすばらしい技があっても医療人としての信頼を失うこととなります。日々の努力を重ね、人格を磨き、苦難に直面しても正面から立ち向かう気概で「志」を高くもって取り組んで下さい。

結びに、諸君が入学時に提出していた決意書を卒業証書と共に、本日手元にお返しします。初心を忘れることなく、志を高く持ち続け、その達成を目指し、「一隅を照らす」人として日々努力を重ねられること、また一人一人幸多からんことを祈念し、学長告辞といたします。

平成24年3月9日

医 学 科



医学科卒業生 87名

■平成23年度医学科卒業生



以上 87名



看護学科



看護学科卒業生 72名

■平成23年度看護学科卒業生



以上 72名



卒業生謝辞
記念品贈呈
学生表彰



平成23年度 学位授与式

平成23年度大学院学位授与式が、去る3月9日（金）午後3時から管理棟大会議室において挙行され、次のとおり学位記（博士及び修士）が授与されました。



■博士課程 15名



(学位授与日：平成24年3月9日付)

■修士課程 9名



(学位授与日：平成24年3月9日付)



平成23年度 学位論文学長賞等授与式

平成23年度に学位記(博士)(修士)を授与された者の中から、特に優秀な学位論文を発表した2名に、3月9日(金)の学位授与式において馬場学長から表彰状と副賞が授与されました。

また、滋賀医科大学シンポジウムの各賞・ベストティーチャー賞・優秀研究者・Doctor of the Year,2011の各賞の受賞者に表彰状と副賞が授与されました。



博士論文学長賞

受賞者名 木下 武

論文題目 Off-Pump Bilateral Versus Single Skeletonized Internal Thoracic Artery Grafting in High-Risk Patients (高リスク患者に対するオフポンプ法、スケルトナイズ法を用いた両側内胸動脈バイパスと片側内経動脈バイパスの比較)

修士論文学長賞

受賞者名 坪内 聖子

論文題目 自己調節鎮痛法による疼痛管理を実施した消化器がん患者の術後疼痛に関連する要因－術前疼痛感受性・疼痛閾値及び性格特性による検討－

第28回 滋賀医科大学シンポジウムの各賞

若鮎賞 山原 康佑

審査員特別賞 楊 宏寛

奨励賞 高野 淳

ベストティーチャー賞

医療文化化学講座 准教授

兼 重 努

優秀研究者表彰

生命科学講座 准教授

小松 直樹

Doctor of the Year,2011

医師臨床教育センター

坂本 愛



名誉教授の称号授与

学校教育法第106条の規定により、滋賀医科大学名誉教授の称号が下記の先生に授与されました。

平成24年4月1日	元教授	佐藤	浩
平成24年4月1日	元教授	早島	理

第35回解剖体納骨慰霊法要

平成24年6月9日(土)午前10時30分から比叡山延暦寺阿弥陀堂において、第35回解剖体納骨慰霊法要を執り行いました。前日からの梅雨により雨模様の天気でしたが、ご遺族、ご来賓、しゃくなげ会会員および学生、教職員総勢約330名が参列し、故人のご冥福をお祈りしました。

今回お祀りした37名の御霊並びにご遺族に対し、馬場学長から感謝の意が述べられるとともに、ご遺族の寄稿文を紹介され、学生に対し、「故人とご遺族の信頼関係や、故人の献体を通して次世代の医師の育成に活かされてつながっているとの尊いご遺志に感謝し、医学教育のために自らの身体を捧げて下さった御霊のことをいつまでも忘れることなく、信頼される医師や人々の幸せに貢献する医学研究者として“一隅を照らす人”に育ってくれることを期待しています。」と述べられました。

続いて、学生代表細尾真奈美君が、「多くの方々に支えられて医師になる」ということを肝に銘じ、解剖実習で得られた知識と経験を礎として、故人のご遺志に恥じることがない医師となるべく努力し続けることをご霊前に誓いました。

法要終了に引き続き、故人(献体者)に対する文部科学大臣の感謝状を学長からご遺族代表にお渡しし、併せて、学生の手によりご遺骨をお返ししました。

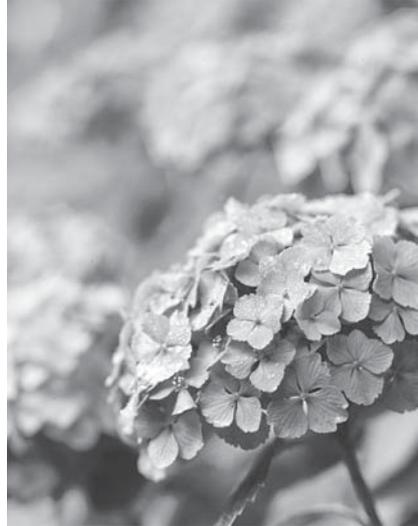
午後から予定されていた比叡山横川にある大学霊安墓地での納骨式は、あいにくの天候のため、ご遺族の皆様方にはご参列いただけませんでした。学長、副学長、しゃくなげ会理事長、学生代表2名と関係教職員が代表して墓地へ出向き、読経の中、焼香を行った後、分骨いただいたご遺骨を学生代表らがお一人ずつ納骨堂にお納めしました。



学生代表の慰霊の言葉



学長による文部科学大臣からの感謝状贈呈



SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

勢多だより

JULY 10, 2012

編集後記

今年度初めて浜松医科大学との交流会に参加しました。これまでは交流会のために講義が減るのは困っていましたが、学生さんたちの一生懸命に試合や応援をする姿を見て、講義2コマ分の価値はあるかもしれないと思うようになりました。

本学は学生のクラブ活動を積極的に支援しています。それは単に友人との交流の機会を持つことを勧めているのではなく、忙しい学業と並行して文化やスポーツの練習に取り組んでその成果を発表会や試合で発揮する、そうしたクラブ活動を通して複数の課題や目標を成し遂げる力を培ってほしいからです。

この号が皆さんのお手元に届くのは西医体のころではないかと思えます。日頃の練習が良い成果に結びつくことを、こころより願っています。

(勢多だよりの由来)

勢多は勢田、世多、瀬田とも書かれるが、古代、中世の文献では、勢多が多用されている。それに勢多は「勢(いきおい)が多い」という佳字名称である。従って、いきおいが多かれと願う本学関係者の想いにぴったりということで、瀬田とせずに、あえて勢多とした。

(題字は、故 脇坂行一初代学長による)

勢多だより No. 93

発行年月日：平成24年7月10日

編集：「勢多だより」編集担当者会議

発行：滋賀医科大学広報委員会



滋賀医科大学

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

学章の説明

「さざ波の滋賀」のさざ波と「一隅を照らす」光の波動とを組み合わせたもの。
「中心に向かって、外からさざ波の波動－これは人々の医への期待である。外に向
かって中心から一隅を照らす光の波動－これは人々の期待に返す答えである。」